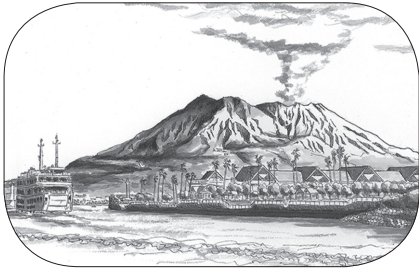


令和5年度

鹿児島県の教育

7月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校校長部会長

迫 田 博 幸

すべての教員等に 特別支援教育に関わる学びを

教育公務員特例法等の改正を受け、令和五年四月、本県教員等の新たな学びの実現に資するため、「かごしま県教員等育成指標」及び「かごしま県教員等研修計画」が全面的に改訂された。今回の改訂で、これまでの「かごしま県教員等育成指標」において、教員一人一人に身に付けてほしい資質の一つの課題対応力の中に含まれていた特別支援教育に関わる内容が、教員等に求められる資質の五つの柱の一つとして位置付けられた。

特別支援教育制度については、平成十九年に学校教育法が改正され、十数年が経過した。現在、特別支援学級等の学びの場の整備や通常の学級に在籍している発達障害等のある児童生徒への校内支援体制も着実に進んできており、今回の改訂は、教員一人一人の特別支援教育に係る専門性の更なる向上につながるものと、とても期待をしている。

教員等に求められる資質の五つの柱の一つである「特別な配慮や支援を必要とする児童生徒への対応」のステージIの具体的な内容は、「個の特性や背景を捉えながら適切な実態把握をすることができると」と「集団に対する効果的な指導（ユニバーサルデザインの考え方に基づく教科指導等）や個に対する合理的配慮の提供を可能とする学級経営と授業づくりをすることができると」となっている。児童生徒の実態把握においては、障害の診断

名にとらわれるのではなく、環境面も含めて、その子の学びづらさや生活のしづらさに着目することが大切であり、その学びづらさや生活のしづらさを抱えた児童生徒が所属する学級集団がその子にとって落ち着ける居場所であることが、特別な配慮や支援を必要とする児童生徒への対応として、まずは基礎となることをここで改めて確認したい。

特別支援学級等が増加してきた背景の一つは、その対象となる児童生徒の気付きに力が注がれてきた成果であるとも言える。このことは、その子の学びづらさや生活のしづらさに応じた特別な教育の必要性からであること十分理解する。ただ、小・中学校等において、発達障害等のある児童生徒にとってのスタート地点が通常の学級であるとするれば、今後は児童生徒一人一人を大切に学級経営の充実という視点での特別支援教育の推進に更に力を注いでいく必要もある。

先に述べた「かごしま県教員等育成指標」のステージIの内容である、適切な実態把握と児童生徒一人一人に應じる学級経営、授業づくりは、個別最適な学びの実現に資するキーワードの一つでもある。様々な課題が山積する現在ではあるが、すべての教員等が特別支援教育に関わる学びを深めていくことが本県教育の更なる充実につながるものと確信している。

令和5(2023)年 7月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	14
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



ひとつひとつの「出会い」を大切に

薩摩酒造株式会社 本坊 愛一郎
代表取締役社長

今までにいろいろな「出会い」がありました。その中で、心に残っている五つの「出会い」をお話ししたいと思います。

一点目は、鹿児島市電との「出会い」です。幼稚園の最初の一年間電車通園をしており、運転手さん車掌さんの一挙一動に私は憧れました。大きくなったら、是非なりたいたいと思ったほどです。車内での案内や口上をよく真似しました。五十才過ぎてからも、車掌さんのカバンの復刻版を購入し、ときたま首から掛けて、昔の車掌さん気取りになったものです。今でもセカンドバッグとして、ときおり重宝しています。

二点目は、アサギマダラという蝶との「出会い」です。千キロ以上も海を越えて旅をするこの蝶の美しさにひかれ、その蝶の採集標本作りに夢中になりました。網も揃え、野山を走り回りました。おかげさまで、蝶を見ると「笑顔」になります。ほっとします。孫と一緒に、蝶を追い掛けるのが一つの夢なので、体力をつけておきたいと思います。

三点目は、私が東京支店長時代、居酒屋チェーン「つば八」の創業者石井誠二さんとの「出会い」です。北海道を皮切りに全国展開され、その後紆余曲折を経て、江戸の町をモチーフと

した「八百八町」等を展開された方でした。ゴルフ好きでしたが、仕事には厳しく、しかも人には優しい人でした。私が仕事上悩んだとき、直接連絡をとると、とても多忙を極める人なのに、必ず時間を割いて、親身になって話を聞き、アドバイスをしていただきました。私は何度、胸をなでおろしたことでしょう。有難いことでした。

私も石井さんのように、人の話をしっかりと聞いて、ちゃんとアドバイスができる人になりたいと思いました。もともととお話ししたい方でした。

四点目は、幼稚園から大学までの友達との「出会い」でした。同じ時期、ともに学びともに遊んだ仲間とは、太い絆で結ばれ、今でも連絡を取り合い、付き合いも続いています。仕事関係でもお世話になることもあり、感謝の気持ちがあります。同窓会や親睦会では、一瞬にして童心に帰り、わけへだてなく気軽に気楽になれるのは、貴重なひとときです。

五点目は、家族との「出会い」です。父母・兄弟・妻そして子供たちです。お互い一緒にいると、いろいろな面が見えて大変なこととは当たり前です。しかし、家族というのは、

略	歴
一九五五年	鹿児島市生まれ
一九八〇年	兵庫県立神戸商科大学 商経学部卒業
一九八〇年	三国コカ・コーラボトリング株式会社入社
一九八二年	薩摩酒造株式会社入社
一九九六年	薩摩酒造株式会社 取締役東京支店長
二〇一七年	薩摩酒造株式会社 代表取締役社長・現在に至る

他の人間関係とは違った避けられない「出会い」です。

家族でも、言わず語らず心と心、というふうにはいきません。常に今まで以上に、ふれあう機会を増やしていき、話し合う中で、しっかりと理解することで、よりよい関係が作られると思っています。もちろん自分の気持ちも、誤解のないように、あるいは誤解を恐れずしっかりと伝えていきたいと思っています。

以上、五つの「出会い」をあげさせてもらいました。最初の四つは、どれも自ら動くことが大切で、「出会い」のその後が続いています。待っていても「出会い」はありません。「出会い」の後、気の合う方へのアプローチを自分で踏み出さないと、せっかくの出会いも「別れ」になってしまいます。

私は、おかげさまで、仕事柄多くの人にお会いする機会があります。挨拶・連絡・相談など、自分でそのチャンスをつかみたいものです。

そして最後は家族との「出会い」ですが、その大本はやはり、縁と恩への感謝です。どうか皆さんも、ひとつひとつ、日々刻々の出会いを大切に毎日を生きてください。



学びに向かう力、人間性等の育成

武岡小(市) 猿 渡 功

一 はじめに

今後、世界は、ますます予測困難な時代へと突入する。そういった時代を確かに生き抜いていく子供たちを育成するためには、資質・能力の三つの柱の一つ「学びに向かう力、人間性等の育成」が重要な要素となってくる。

二 主体的に学習に取り組む態度

具体例の一つが、「主体的に学習に取り組む態度」である。子供たちは、卒業した後も、「自ら学び続ける」ことが必要になってくる。そして、それを可能にするためには、学校教育の中でこそ、「学びへの喜び」を育んでいくこと、経験させていくことが重要となる。

将来への夢や希望がもてず、何に対しても自信がなく、学習への意欲をもちにくく、結果、学校で過ごす時間をただ友達と楽しくしてあげたいと考えていた児童がいた。そんな彼が、新年度になって、少しの変化が表れてきた。担任の先生が、放課後、算数を教える時間をもつようにしたのだ。分かることから、スモールステップで取り組ませた。すると、「俺、分かるようになったかも」と、少しずつ課題にチャレンジする姿が見えてきた。「分かるからうれしいうえに、やってみよう。」と思うのである。「学びへの喜び」を経験し

た子供たちは、自然と学習にも向き合おうとする姿が出てくる。

三 自己の感情や行動を統制する力

もう一つが、「自己の感情や行動を統制する力」である。家庭でのやりとりを含め、友達との関係、教師との関係など、その交流において、様々な感情が表れる。それは、望ましい感情だけでなく、望ましくない感情や望ましくない行動が出てくることもある。そのため、そういった感情や行動を自分自身でコントロールしていく力を身に付けていくことが社会生活を送る上で、必須になってくる。教室において、イライラしたり、不安になっていたりとすると、「学びへ向かおうとする意欲」さえ、湧いてこないものである。興奮している状態のとき、指導してもなかなか届かない。しばらく時間をおいたり、場所を変えたりするなど、心が落ち着いていた状態で、「どんなことが悪かったのか」「どうすればよかったのか」など、「本人のよさ」を語りながら、「本人に期待すること」について、粘り強く語り、ときに、望ましい行動を練習させたりしていくことも大事である。また、大切なことは次の行動で少しでもいい変化があった際には見逃さずに「褒め・認め・励ます」こと

四 対話する力

である。

昨年度の送別会で、送り出す職員一人一人に見送る職員が思い出されたスピーチをした。その人となりや数々のエピソードを聞きながら、「もっと先生方のことを知っておけばよかった。」と後悔した。着任して一年の付き合いがなかった私が知らないこともあって当然なのだが、もっと積極的に関わりをもっていたら、もう少し、違った学校経営ができたのではないかと反省した。校長は、必要なときに必要な事だけを話すだけではダメなのだと感じた。教師同士のコミュニケーションに限らず、子供たち同士の対話も推進していくことが大事になってくる。今の時代、「相手のことが頭にきたから叩いた」では、済まされない世の中でもある。「困っていたけれど、誰にも相談をしなかった」でも困る。「相手の話に耳を傾け、自分の考えを述べる」といった対話を意識的に継続していくことで、自己有る感も確かなものになってくる。また、この「対話力」は、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度にも繋がってくる。

五 おわりに

学校力は「チーム力」でもある。全職員とどのようにしたら、子供たちの「学びに向かう力、人間性等」を育成できるのか、実践を通して、検証していきたい。研究テーマは、「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり」『学びに向かう力』の育成をめざして」となった。



併設校の取組から考える 幼・小・中の連携

西阿木名小中(大) 久木崎 晃 誠

一 はじめに

本校は、同一敷地内に小学校附属幼稚園もある小中併設校である。また、県内で二校しかない分校(西阿木名小三京分校)もあり、校長は園・小・中・分校を兼務している。

そこで、幼・小・中の連携に関して、本校の取組から考えていきたい。

二 「幼小連携」の取組

幼稚園卒園後、小学校に入学する園児が学校の雰囲気になれるように、水泳発表会・運動会・学習発表会等は幼小中合同で、クリスマス会や節分集会等は、幼稚園に低学年児童を招いて行っている。また、小学校のなわとび集会には、低学年の部で参加している。

幼稚園の職員は卒園後の園児の様子が気になり、小学一年生担任は入学前の実態を知りたいものだろう。幼・小それぞれの職員が、小学生・園児が活動する様子を参観することにより、卒園前後の実態を捉え、それを踏まえた情報の交換・共有がなされ、一人一人を大切に支援に生かすことができる。

本年二月に示された「架け橋期の教育の充実」のために、幼小で協働しながら架け橋期

のカリキュラムを作成する等、さらに充実した幼小連携に取り組んでいきたい。

三 「小小連携」の取組

三京分校は現在、地元の子はおらず、山海留学生の児童だけが在籍している。

西小と合同で行う夏の水泳学習の第一回目「プール開き」の日に、朝から昼休みまで一緒に過ごす交流学習を実施している。いつもは、複式学級ではない単式学級で、いつもとは違う友達もいる雰囲気の中で授業を行うことは、とても新鮮に感じるようである。

職員にとっても、お互いの学校の先生や子どもの様子を知ることによって、学校間の垣根を外した交流を深める良い機会となっている。この後の様々な行事や合同活動等が行われる際に、連携を図りながら円滑に進めることにも繋がっている。

小規模校において、多くの子どもたちと交流できる小小連携の取組は、とても大切である。連絡・調整等の苦労や移動・準備等においての大変な面もあるが、一人一人の笑顔のために尽力していきたい。

四 「小中連携」の取組

本校では、小学生(主に六年生)が特定の期間、実際に中学校の教室で、中学校の先生と共に学習する「TTプロジェクト」の取組を行っている。この取組を通して、中学校の雰囲気や先生方が分かり、学習の進め方にも慣れ、円滑な接続が図られている。教師側も、入学前の生徒の実態を事前に把握できるので入学当初からの適切な指導に生かせる。

また、小中合同実施の校内研修では、年間を通して一人一研究授業や各種学力テスト結果の分析等の取組を通して、中学校で力を伸ばすために必要となる小学校での指導の在り方や身に付けさせたい力等に関する話し合いがなされる。

その際、小学校の旧担任と中学校の現担任が、当時の実態と現在の様子の情報交換を行うことを通して、その子に必要な個に応じた適切な支援を考えることにも繋がっている。このような、一人一人の九年間の成長を見通すための小中一貫にも繋がる小中の連携を図っていきたい。

五 おわりに

子どもは地域の宝であると言われる。これからの未来を支える子どもたちの健やかな成長のために、十二年間を見通した「幼小・中連携」の取組はますます重要になると思われる。学校や地域等の実情に応じて、できるところから進めることが望まれる。

併設校の校長として、さらに充実した連携が図られるよう職員と共に努めていきたい。



よさを生かし伸ばし合う

キラリ輝く子どもの育成

柳迫小(隅) 海江田

聡

一 はじめに

本校区は、東西に細長い曾於市末吉町の北側にあり、国道一〇号線と県道末吉財部線が校区の中心で交差する場所、北に霧島連山が見え、東は宮崎県都城市と隣接する県境にある。創立一二四年、児童数六九名、五・六年複式、特別支援学級二の全七学級で児童は、素直で元氣よく挨拶ができる。

学校教育目標は「よさを生かし伸ばし合うキラリ輝く子どもの育成」である。この目標達成に向け教師と児童が一体となった教育活動を展開している。

二 学校経営の重点目標

全職員が共通理解のもと、連携して安心・安全で子どもたちが進んで学習活動に取り組む姿勢の育成を目指している。そこで、本年度は、「豊かな心を育む」「資質・能力を確実に育てる」「安心・安全で健やかな体を育む」「業務改善・働き方改革の推進」「家庭・地域と共に歩む」を重点目標に設定した。

三 取組の実際

(一) 豊かな心を育む

お互いの「よさ」を認め合う教育活動を展開し、豊かな人間性や道徳性を備えた「キラリ輝く人づくり」に努めている。「学校が楽しい」を実感させ、「聴き方名人」相手の話をしっかり聴ける子どもの育成を目指している。

(二) 資質・能力を確実に育てる

ICTを活用し、「主体的・対話的で深い学び」を通して生きて働く知識・技能、思考力・判断力・表現力の育成を図る授業づくりに努めている。一人一台のタブレットを活用して自分の意見をしっかりと持ち、友達の見たと比べ、教え合ったり、互いによりよいものにしようとしたりする態度を育てる。

(三) 安心・安全で健やかな体を育む

危険箇所や補修が必要な場所等の安全点検をもとに早急に改善を図るとともに、個々のテーマをもった体力づくりや健康チェックを進める。特に本年度は、う歯治療

一〇〇%と家庭でのメディアルール設定一〇〇%に取り組んでいる。

(四) 業務改善・働き方改革を推進

業務改善・働き方改革を進めることで職員がやりがいをもって働き、教育の質の向上に繋がると考える。職員一人一人に業務改善Iactionを設定させ、面談時に自己評価させる。

(五) 家庭・地域との連携

地域の「よさ」を取り入れた特色ある教育活動を展開する本校の特色として「見守り隊」による登校時の安全確認・本年度から公民館活動から校区コミュニティへの変換により、地域と学校の連携が密となる活動を進める。

四 おわりに

本年度、「人権の花運動」の指定校になり、一人一人に人権があることを理解し、自分の自由・権利を正しく主張できる子どもを育成していきたい。また、ほかの人にも自分と同じように権利があることを自覚させ、思いやりの心を培っていく。

さらにまた、本校区では、公民館活動から地域コミュニティへと形を変え、これまでの学校と地域の関係にも変化が出ている。地域の要望と時代の変化において、変えてはいけない大事なことから、変えていくよさを考えながらチーム柳迫として学校経営を進められるようにコミュニケーションを大切にしていく。



生徒の無限の可能性を

引き出す学校を目指して

出水中(北) 別枝 昌仁

一 はじめに

本校は創立七七年目、出水平野の中心に位置する生徒数五五一名、二一学級の学校である。校区内には三小学校、武家屋敷群や特攻碑公園等の史跡、体育文化施設等、歴史や文化、教育、経済に関する資源が豊富である。「あいさつで咲かせよう笑顔の華 目指せあいさつ日本一」、「気付き、考え、実行する出水中」を合い言葉に、生徒会を中心とするあいさつ運動やボランティア活動が伝統となりつつあり、本年度は縦割り無言清掃、「ノーチャイムの日」にも取り組んでいる。

二 学校経営の基本方針

学校教育目標は、出水市教育理念「郷土を愛し文化を伝え豊かな心を育む町づくり」を踏まえ、「自他を愛し、互いに高め合う想像力と創造力、行動力を備えた心身ともに健全な人材の育成」としている。生徒や保護者、地域に実践事項「相手よりも先に笑顔で挨拶」、「自分も相手も大切にする言葉のやり取り」、「無限の可能性を引き出すよりよい選択」、「朝日を浴びて登校」を示し、家庭、地域と連携を図りながら目標達成を目指して

三 令和五年度の重点

(一) 確かな力を育てる学習指導

学力向上に向けて、知識・理解の質を高める授業づくりに努め、特に「読み」「書き」を重視した学習活動に取り組んでいる。

また、結果にこだわる取組として、生徒用端末や演習問題を活用した個別最適な学びの推進とともに、本年度の全国学力・学習状況調査の自己採点結果を踏まえた指導改善を進めている。

さらに、グローバル化に対応した外国語教育の充実のために、昨年度から台湾の中学校との交流を行っており、本年度は学校訪問受入による直接交流を予定している。

(二) 心豊かな環境づくり

課題が継続している不登校への対応として、県の「魅力ある学校づくり」の視点からの指導改善、生徒会活動の活性化、ローテーション道德の実施、読書活動等の推進を図っている。あわせて、生徒用端末を活用した月例アンケートの実施や副担任と連携した生活の記録の点検等から、生徒の心

情変化の把握と迅速な対応に努めている。

(三) 健やかでたくましい心と体の育成

授業における心身の耐性を高める体育指導の実践とともに、虫歯治療率八〇%、朝食摂取率一〇〇%を掲げ、PTA活動と連動して健康教育・食育の充実に努めている。また、自転車登校生に加えて、全生徒に対する安全指導の徹底に努めている。

(四) 地域と共にある学校づくり

第一学年で市内の自然や文化に直接触れる学習を、第二学年で校区内の戦跡巡りを通した平和学習を実施している。今後は、市内の豊富な情報や人的・物的資源の更なる有効活用を図り、生徒が郷土に誇りを持ち、また、郷土の課題解決を通して自己有用感を高める機会を増やす予定である。

(五) 指導力を高める組織マネジメント

県のコアスクール指定校一年目として、指導力向上と同僚性涵養を図る研修の推進と研修方法や成果の他校への普及を目指している。また、学習指導要領や生徒指導提要等の理解促進を図るために、定例の教科等部会の設定や資料共有を行っている。

四 おわりに

本校の強みは、純粹で、思いを素直に表現でき、学習や行事等に真面目に取り組む生徒、明るく前向きで、生徒に寄り添う教職員、さらに、本校の教育活動に対して協力的な保護者や地域の存在である。今後も関係者全員で生徒の無限の可能性を引き出す学校経営に努めたいと考えている。



「寺山×探学的学習」で

学びに向かう意欲と態度を育てる

吉野東中(市) 田中 真一郎

一 はじめに

本校は、昭和五十八年に吉野中学校の生徒数の激増により分離して開校し、今年度創立四十一年となる学校である。寺山の裾野に位置し、校区内には、西郷さんが子弟八十四名とともに鋤をふるい、汗を流し、心身の鍛錬と後継者育成にいそしんだ吉野開墾社跡もある。校訓には「勤労」の文字があり、開校当時は寺山の農園でのさつまいも、かぼちゃ、落花生などの栽培・収穫、茶摘みなど、寺山の農園での体験活動が多くの時数行われていたようだ。時代は移り、学校周辺には次々に宅地が並び、生徒数は五百三十名を超え、年々増加する一方である。教育課程も体験活動が減り、加えてここ数年のコロナ禍により生徒たちは一層生活体験も減っている。「しなやかなたくましさ」の育成を掲げ学校教育の充実を目指すのが、生徒の根源的な学びに向かう姿勢に不安を抱く。そこで、ふるさと吉野・寺山に思いを馳せ、ふるさとの発展のために何ができるのかを考え行動する意欲と態度を育みたいと考え、寺山学習を探究的な学習の視点から充実させようと取り組んでいる。

二 寺山×探学的学習の試み

(一) 寺山炭窯跡のボランティアガイド

令和二年度から、吉野兵六会の事業と連携し、本校生徒に呼び掛けて有志で炭窯跡のボランティアガイドの活動を行っている。そこでのいきいきとした生徒の学びの姿を全校に広げ、総合的な学習の時間に取り入れられないかと考えた。



寺山炭窯跡でのガイド活動

(二) 総合的な学習の時間における寺山学習

本校の総合的な学習では、一年生で寺山を中心とした郷土学習を展開している。寺山は体験活動を通じて様々なことを学べる可能性をもっている。

- ① 校区内にある世界遺産「明治日本の産業遺産」である寺山炭窯跡
- ② 広葉樹が広がる寺山の植生
- ③ ジオサイト寺山展望台・火砕流堆積物の地層を見ることができる。
- ④ 戦国時代から有名だった九州一の馬の産地「吉野牧」 など

三

このことを生かし、探究的な見方・考え方をよりよく発揮し、その課題を自分事として捉え、メタ認知を駆使して自己の生き方や将来の在り方を思考するという学びを展開したい。令和四年度は、寺田仁志先生の寺山講話、仙巖園での学習を核に実践した。令和五年度は、学校運営協議会委員にも入っていただいている鹿児島大学名誉教授、大木公彦先生や市教委文化財課と連携して、寺山展望台や寺山炭窯跡での学習を加え、まとめと発表をボランティアガイドという形で行うことを考えている。そのことで「誰に対して」という相手意識を強め、学んだことが「社会のために」という実感と、今後の自分の生き方を考えることにつながればと期待している。

おわりに

令和五年度、本校は鹿児島市教育委員会の事業である「未来探究プログラム」を二年生で実施する。この事業は、総合的な学習の時間において、生徒が地元鹿児島企業の企業と連携・協働し、社会の多様なテーマに探究的に取り組むことで、自分自身の在り方、生き方、働き方について考えていく教育プログラムである。実践を通じて、生徒の根源的な学びへの意欲を喚起するとともに学びに向かう意欲と態度を一層育みたい。また、教師にとっては、学習設計や学習支援の具体化のノウハウを身に付けるとともに、ファシリテーションの技能を高め、カリキュラムマネジメントの重要性を理解する契機となればと思っている。その成果は、本校オリジナルの寺山学習に還元し、生徒が輝く学びの実現を図りたい。今からワクワクしているといるところである。



子どもが輝く三つのつながり

中種子特支 眞下 千代子

一 はじめに

本校は、種子島のほぼ中央、中種子町の高峯と呼ばれる高台にあり、西南方向に屋久島の勇姿が眺望できる。昭和五十一年に中種子町立野間小・中学校「あかつき教場」が県立に移管され、鹿児島県立中種子養護学校として開校し今年創立四十八年目を迎える。平成三十年度には屋久島高等学校内に高等部支援教室を設置した。また、離島では最初の特別支援学校であり、熊毛地区の特別支援教育のセンター的役割を担っている。

二 子どもを輝かせるための三つのつながり

(一) 地域とのつながり

本校のある種子島は、自然も人の心も豊かな島である。種子島の歴史を見ると理由は様々だが、いろいろな地域から多くの移住者を受け入れてきている。こうした背景があるからか屋久島も含め熊毛地区では、多様性を認め合う共助性をもつ風土が育ってきたのではないかと思う。

本校設立に関わった中種子町特別支援教育振興会では、町民から寄付を集め特別支援教育の充実を図る活動を行っている。地

域の方々の特別支援教育の理解は深く、本校の社会見学や校外学習などの際に、積極的に関わっていただくなど地域の方の温かさを感じている。

高等部では、三年前から地域の方の協力をいただき、無償で提供された畑でさとうきび栽培と黒糖作りに取り組んでいる。実際に自分たちで育て、収穫し、加工する一連の流れを行うことが、地域の産業についての理解につながり、また、郷土愛を育むとてもよい機会になっている。地域との温かいつながりに感謝である。

(二) 学びのつながり

令和二年度から「児童生徒の主体的・対話的な姿を引き出すための授業づくり」をテーマに掲げ職員研修に取り組んでいる。GIGAスクール構想に基づき、二年度は主体的な学びにつながるICT活用について研修に取り組み、一定の成果を上げることができた。しかし、課題として、教師が授業展開や指導法についてこれまでのやり方に囚われがちであることが挙げられた。そこで今年度は、これまでの授業展開を見

直し、「主体的」な学びを教師自身が経験し、それを授業展開や授業づくりに生かしていくことにした。まずは教師自身が主体的に研修し主体性の意味や学びの本質を再確認し、それを職員全員で共有したい。そして、この研修を通して子どもたちの主体的な学びへとつなげていきたいと考えている。

(三) 児童生徒のつながり

本校は児童生徒数四十九人の小規模校である。隣接する学園に入所している児童生徒も多く、対人関係が広がりにくい。しかしながら本校は小・中・高等部があるため、上級生が下学部の子どもの思いやり世話をするなどつながりは深く、信頼関係が築きやすいなど小規模校の良さがある。昨年度から人権教育の一環として、全校生と職員の写真を用いて「ひまわり畑」の作成を行っている。紙の花びらにそれぞれの良さを書き合うのだが、つながりの深さもあり、いろいろな良さが書かれている。温かい言葉が詰まった「ひまわり畑」とそれを読む子どもたちの笑顔で廊下が賑やかになっている。

三 おわりに

哲学者のハンナ・アーレントが教師に望むこととして「子どもが生まれた世界を理解して、新しいことをする機会をもてるようにすること」と挙げている。

子どもたちが輝く学びを広げ、様々な機会をもてるような学校づくりを目指して私自身も主体的に取り組んでいきたい。



恩送り

川原小(始伊)塚 田 輝 司

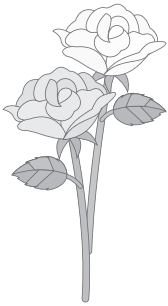
これまで出会った方から、多くのことを学んだ。気の短い私に校長室に掲示されていた「怒りは無知、おごりは無能、涙は修行、笑いは悟り」を指さし、「私はこれをよく見ている」と教えてくださった校長先生がいた。この言葉を私も校長室に掲示している。

さて、ゴルフを始めて間もない頃、ゴルフボールをよく紛失していた。いわゆるロストボールだ。少し多めにボールを準備していても、手持ちのボールを全て失ってしまい、先輩からボールをいただくことが度々あった。少しゴルフに慣れたころ、先輩にボールを返したいと伝え

ると、「ボールは返さなくてもよいから、いつか一緒にゴルフをした方で、ボールを紛失して困っている人がいたら、その方にボールを渡してください」と言って、次のホールに歩いて行った。三年もすると、ボールを紛失して困っている方がいたので、私も先輩と同じように、ボールを渡した。恩を返せたという気がして少しうれしかった。

未熟な私を見かねて、声を掛けてくださった先輩がいた。ときには食事をご馳走していただきながらいろいろと教えてくださった先輩に、感謝の言葉を伝えたところ、貴方が学んだことを、次の世代に繋げて人材を育てることが、恩を返すことだと教えられた。

受けた恩を、直接その方に返すのではなく、別の人に送る恩送りについて、二人の先輩に教えられた。「怒りは無知、おごりは無能、涙は修行、笑いは悟り」など、これまでいろいろな方の教えや恩に感謝し、私らしさを加え、次の世代に恩送りを続けていきたいと思う。



愛着は、いつでも誰にでも

形成・修復が可能です。

菱田小(隅)福 森 真一

十年ほど前から愛着不全の問題が気になっており、和歌山大学の米澤教授による講義をオンラインで受講した。その中で伺った言葉である。驚きと同時に安堵した瞬間だった。

文科省によると、小学校における暴力行為が増加傾向にある。愛着不全の問題を抱えている子どもたちの増加と関連しているのではないだろうか。今から思うと様々な機会に愛着不全の問題を抱えていると思われる子どもたちと出会ってきたのだと分かる。この子どもたちは年齢相応の感情の発達がうまくできていない。体は成長しても、感情面は幼子のままである。「自分を見てほしい」「かまってほしい」という強いアピールと、試し行動を繰り返す。また、感情のコントロールが難しいため、周囲からすると自分本位とも受け取られがちな言動や、ときには攻撃的な言動をしてしまうことがある。すると、どうしても周囲の大人から注意・叱責を受けることが多くなり、自尊心が低下していく。

「どうせできない。」と、すぐにあきらめる姿や、「自分ばかり。」と被害的に捉えてつぶやく声は、子どもたちからの悲鳴にも聞こえる。

自己防衛のために、事実を切り取ったり、事実を曲げたり、作り話をしたりして、ガラスのような心を守ろうとする子どもたち。指導を受けている子どもたちの目には、大人の姿が、自分を責める「敵」のように映っているのではないだろうか。一方、教師は、「この子のために」と思い、繰り返し心を込めて言葉を掛けるが、それがなかなか届かない無力感と、日々の出来事により疲れていく。

愛着不全の問題を抱える子どもたちが落ち着いて学んでいくためには、教師が、愛着の形成を意識して関係づくりに取り組むことが必要だと学んだ。「愛着形成」と聞くと重く感じてしまいが、子どもたちが安心し、信頼できる関係をつくり出すことであると捉えると、生徒指導提要で示されている内容と重なる部分が大きく考える。

「〇年生なら、このくらいは感じ取ってほしい。」という私たちのこれまでの経験知をいったん横に置き、感情がうまく発達できていない子どもたちがいるという現実を見つめ、感情を

育むことを意識した教育が、今、必要とされているように思う。

三つの「あ」

野間小(熊) 吉 國 耕 二

三年前の四月に新任校長として前任校に赴任した。一か月も経たないうちにコロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休業となり、行事の中止や見直し、時数の確保などとても苦労したことを思い出す。そのような状況の中、実施した家庭教育学級で、講師として以前お世話になった先輩の先生をお呼びして子育てについて講話をいただいた。その中で「子供たち一人一人は個性があり、また家庭環境も違う。それぞれの家庭のやり方で子育てをしてほしい。」と言われたことがとても印象的だった。最後に子育ては三つの「あ」という話をされた。三つの「あ」とは「あわてず、あせらず、あきらめない」という言葉だった。この言葉は、当時新任校長で、コロナ禍における学校経営に悩んでいた自分の

心に大きく響いた。迷ったときや判断を要するとき、この「あわてず、あせらず、あきらめない」という言葉が心の支えとなった。

今年の四月に現在の学校に赴任した。五月連休後からコロナウイルス感染症も第五類になり、様々な会議や地域行事も四年ぶりに復活し、開催される方向で動いている。しかし、そのまま実施されない行事等もある。コロナ禍の三年間で変わったことが日常になり、コロナ禍前の日常に戻すには大きなエネルギーが必要となっているものもある。学校行事等についても、コロナ禍前の内容に戻すか、それともこのまま縮小または中止で継続するか意見が分かれる。当然、行事精選や業務改善から、元に戻さなくてもよいものもあるが、コロナ禍前の本来の姿に戻したい行事もある。職員や保護者、地域の意見を聞きながら悩む日々が続く。そんな中、よく思い出すのが「あわてず、あせらず、あきらめない」の言葉である。今年は、コロナ禍からの節目の年でもあり、様々な課題や変化が見られる年でもある。三つの「あ」の言葉を支えに、様々なことにしっかり向き合って、学校経営を進めていきたい。

人の一生は重荷を背負うて遠き

道を行くがごとし急ぐべからず

出水工業 鶴川 聖一

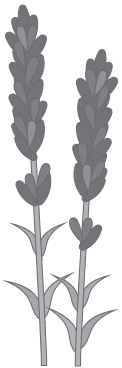
今年のNHK大河ドラマは、「どうする家康」である。次々に降りかかる問題に「どうする」と対処を求められる家康が、時に弱音を吐き、周囲に文句を言いながらも、厭離穢土欣求浄土を目指し、戦のない世を創るために挑む姿が楽しみでもある。(これまでにない家康像に多少・・・する感はあるけれど)

さて、私の実家には何故か徳川家の家訓が掲げられていた。「人の一生は重荷を背負うて遠き道を行くがごとし急ぐべからず。心に望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思え。勝つ事ばかり知りて、負けること知らざれば害その身にいたる。己を責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり。」である。居間の時計の横に掛けてあったので、よく目についた。教育職員となり三十四年の遠き道を歩んできた。生徒の一生をも左右しかねない教職員の仕事は、大変重い荷である。景気の悪いときに、仕方がないこ

ととはいえ、専門外の就職口しか斡旋できなかったことは申し訳なく思っている。その日その日を懸命に過ごしてきたと思っているが、生徒のためになったのかどうか、自信はない。ここまで、周囲の先輩方や同僚に支えられ、保護者の協力を得ながらたどり着けたことには、感謝しかない。教務主任のときに中央研修へ行つた際に「不登校の生徒に教務主任として何ができるか？」と尋ねられた。担任任せにせず学校全体で取り組む体制づくりは、今日でも課題である。

生徒たちも、一人一人重い荷を背負ってそれぞれの道を進む。その際に少しでも荷が軽く感じられるようにと、今年も、「生徒が一生を通じて成長していく確固とした基盤を築く学校」をめざす学校像として掲げた。

校長として、次々に現れる「どうする」に対応するにあたり、中央研修時代の合い言葉であった「すべては生徒の未来のために」を判断基準にして、これからも家訓を胸に「どうする」に向かっていきたい。



ある日の校長講話



わかくさの像

武小(市) 杉木 正一郎

みなさんこちらの写真を見てください。これは武小学校の中にあります。どこにあるか分かりますか。そうですね、場所は校舎の前です。わかくさの像と書いてあります。

人が二人、二人ともランドセルを背負っている。なので小学生でしょう。朝、学校に来るところでしょうか、それとも学校から帰るところでしょうか。

前の人より、後ろの人のほうが少し背が高いです。姉弟でしょうか、友達でしょうか。



ら、どんなおしゃべりをしているんでしょうね。像ですの、動いたり、考えたり、おしゃべりしたりすることはありませんが、でもこんなふうにいると想像しながら見ていると、なんだかお話が生まれそうです。この二人がここに来るまでにどんなことがあって、このあとどんなことが起こるのでしょうか。長い物語の、ある一つの場面を見ているようですね。

強く生きる子どもに

(日曜参観での講話)

飯牟礼小(旦) 東別府 義 治

もう何年も前のことですが、県主催の事業で夏休みに県下五十名程度の児童生徒を連れて奄美大島にある無人島へ行ったことがあります。

二人とも雨靴を履いています。前の人はレインコートを着ていて、後ろの人は傘をさしています。前の人は手を左右に大きく広げて、顔は上を向いて、大きく口を開けています。何か言っているんでしょうか、それとも歌っているんでしょうか。片足で立っていて、なんだか走りだそうとしているようにも見えます。後ろの人も顔は上を向いています。傘をさしていますが、傘は後ろの方に向いています。雨が降っているとき傘をこんなふうにしたらずぶぬれになっってしまうですね。どうやらもう雨は降っていないようです。さつきまで降っていた雨が止んだということでしょうか。この人たちは二人とも同じ方を見えています。何を見ているんでしょうね。どんなことを考えているんでしょうね。そして、二人で何かおしゃべりをしているとした

この像は、今から二十七年前、武小学校が創立六十周年のときに、鹿児島市出身の彫刻家、上床利秋さんが作った作品です。上床さんはこの作品に題名を付けています。題名は「雨のち晴れ」です。校長先生は上床さんとは会ったことも話したこともないので、上床さんがこの像にどんな思いを込めたのか本当のところは分かりません。ですが、雨が上がったことを喜んで元気に駆け出す子供、雲を割って差し込んでくる明るい日差し、エネルギー、武小の子供たちが、健やかに、あかるく、元気よく育ってほしい。上床さんは、そんな思いを込めてこの像を作ったのかもしれない。

さて、何もない無人島に着いて、子どもたちが発する言葉は何だと思えますか。「エアコンがほしい。」でした。お腹がすくと、「お母さん、ご飯。」と叫ぶ子もいました。仕方なくかまどを作り、飯盒でご飯を炊きました。食後も、暗くなる前に海水で食器を洗い、お風呂の代わりに海で汗を流します。日常生活では味わえない大変な体験です。ですが、そんな生活を三・四日続けていると、だんだんとたくましくなっていくのが分かります。そして、無人島を離れる頃になると、「ここで暮らしたい。」という子どもも出てきます。環境が子どもを変えたのですね。便利ではないけれど、「生きる」楽しさを体全体で味わったのではないのでしょうか。

無人島には簡単に連れて行けないけれど、子どもたちに、「生きていく」という実感

を味わいたいですね。学校・家庭・地域で子どもたちに役割を与えることにより、自分でやっているという充実感を与えていければと考えます。

学校では、縦割りの活動を充実させます。教師は、できるだけ口を出さずに、子どもたちだけで活動させます。うまくいかなければ、どうすればよいのか自分たちで考えてもらいます。

地域に対しても公民館活動を中心に児童・生徒に役割を持たせるようお願いをしています。地域行事においてお客様ではなく、自分たも参画しているという意識をもってほしいからです。

家庭でも家族の一員として、自分にできることを継続させてほしいと思います。「両親とも忙しいのだから、お風呂掃除はほくが責任を持つてする」「洗濯物は私がたたむ」など、家族で話し合い、できることを継続させてください。学校・家庭・地域が一体となって、子どもたちが将来に向けて、強く生きていけるようにオール阪牟礼で力を合わせていきましょう。



世界自然遺産の島に住む

伊仙小(大) 佐々木 久 志

令和三年の七月、私たちの住む徳之島をはじめ、奄美大島、沖縄島北部、西表島の四つの地域が世界自然遺産に登録されました。世界自然遺産とは、世界中の特別な自然地域を保護し、大切にするために選ばれる場所です。

徳之島は、美しい自然が豊かに広がっている島で、きれいな海や美しい山々があります。また、島には珍しい生き物や植物が生息しています。このような貴重な自然を保護するため、奄美群島の四つの地域が世界自然遺産に登録されたのです。

世界自然遺産に登録されたことにより、徳之島は世界中から注目されることとなります。この島の魅力を世界中の人々に知ってもらえる大きなチャンスです。世界各国から観光客や研究者が訪れ、経済的にも大きな効果が期待されています。しかし、それと同時に、この豊かな自然を、これからもずっと守り続けていく責任が、私たちに課せられているのです。

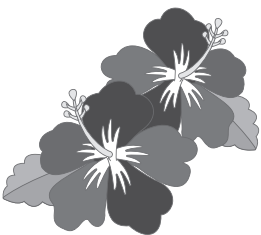
では、この島に住む私たちは、どんなことに

心掛ければよいのでしょうか。

- ① 自然の大切さや保護について学びましょう。
- ② 周辺のごみを拾ってきれいにしましょう。
- ③ 電気や水の節約に心掛けましょう。
- ④ 進んで花や木を育てましょう。
- ⑤ ものを大切にし、無駄遣いを減らしましょう。
- ⑥ 地域のボランティア活動に参加しましょう。

どうですか。私たちにもできることがありますね。

さて、今度の日曜日は、クリーン作戦(地域清掃)の日です。毎回多くの小学生が参加してくれるので、地域の方々も喜んでくださいます。世界自然遺産の島に住む一人として、次回も進んで参加しましょう。



話のひろば



ぼる馬車

阿久根小(北)

中村 一成

今から二十年ほど前、ある町で社会教育行政に携わっていたときの話である。

当時、全ての人に

情報リテラシーを備えるための基礎技能を修得してもらうため、全国でパソコン初心者に対する「IT講習会」が開催された。その講習会に、七十歳を過ぎたSさんも参加されていた。Sさんは、旦那さんと小さな商店を経営されていたが、病気がちな旦那さんの少しでも手助けになればと棚卸表を作りたいという思いと、外国で暮らす子どもや孫とメールでやり取りをしたいという思いで、この講習会に参加されていた。

はじめは、パソコンの立ち上げ方から、文字入力もうまくできず悪戦苦闘されていたが、分からないことをそのままにせず、講習会のない

日にも電話で質問するなど熱心に取り組まれた。その努力が実り、講習会が終了するころには、パソコンの技能はもちろん、子どもや孫ともスムーズにメールのやり取りができるようになった。またもう一つの目標であった棚卸表作りにも取り組み、二千アイテムに達する棚卸表をみごと作り上げられた。

Sさんは、棚卸表を仕上げた後、新たにパソコンで「自分史作り」にも挑戦された。ご両親のこと、戦争で亡くなられた兄のこと、旦那さんとの出会いのこと、子育てのことなど、七年の道のりを七十ページにまとめ上げ、私にも一冊くださった。「ぼる馬車」と名付けられたその一冊は、二十年経った今でも赴任先で「学ぶ」ということを考えるとき、紹介させていただいている。

急激に変化する時代の中で、ICTや先端技術の効果的な活用など、新たに学ばなければならぬことが多々ある。しかし年齢を重ねるごとに、その流れに付いていけない自分がある。Sさんは、パソコンを操作しながら「新しいことを学ぶのは楽しいね。世界が広がるね。」とよくおっしゃられていた。Sさんの言葉を思い出し大切にしながら、自分自身も新たな学びにチャレンジしていきたい。

SDGsに

関連する取組

池地小中(大)

花里 弘 克

最近、メディア等で頻繁に見聞きするようになった言葉に「SDGs」がある。SDGsとは、「持続可能な開発目標」

のことであり、世界中にある環境問題・差別・貧困・人権問題といった課題を二〇三〇年までに解決していこう」という計画・目標のことである。「持続可能な」とは、人間の活動が自然環境に悪影響を与えず、その活動を維持できることを意味している。

現在、企業に限らず、学校教育においてもSDGsを意識した教育実践が求められている。

以下、本校におけるSDGsに関連した取組について紹介したい。

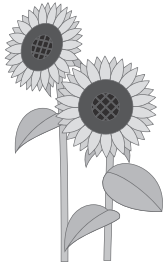
SDGsは、十七の目標を掲げており、その中に「海の豊かさを守ろう」「つくる責任 つかう責任」という項目がある。先日、クンマ海岸の清掃作業を行った。美しい海で有名な海岸であるが、海岸の隅には、国内外からと思われるプラスチック製の漂着ごみがたくさん落ちていた。子供たちが黙々とごみを拾って回る姿が印象的だった。ぜひ、子供たちには、今回の海岸清掃を通して、自分が気付いたり、考えたり

したことを今後の学習につなげてほしいと思う。

また、本校の特色ある教育活動の一つに「ウケユリ観察会」がある。ウケユリは、奄美大島本島、加計呂麻島、請島、与路島にわずかに点在するので数が少なく、絶滅のおそれがある植物として知られている。毎年、子供たちは六月にウケユリの観察を行っており、地域のガイドからウケユリの生態や希少性について話を詳しく聞いたり、ウケユリのスケッチを通して、自分が考えたりしたことをまとめる活動をして継続している。

SDGsの目標の中に「陸の豊かさを守ろう」という項目がある。子供たちには、ウケユリ観察会での取組がこの目標と関連していることに誇りや自信をもってほしいと思う。

このような活動に限らず、子供たちが日頃から教科の学習内容とSDGsの目標との関連を意識することで、「今、自分たちにできることは何か」を考え、実行できるように頑張ってほしいと思う。



「ありがとう」と

「ごめんなさい」

志布志中(隅)

青山 智 宏

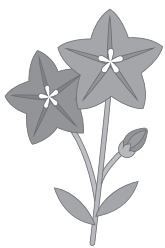
卒業していく生徒に向けて、いつも私が伝えていた言葉がある。それは、フランスの作家、ロマン・ロラン氏の言葉「人生に往復切符はありません。ひとたび出立したら、再び帰ってきません。」という言葉である。日本でも「時は金なり」という諺があり、誰しも時間は巻き戻しのできない大切なものという自覚はある。教師であればなおさら、時間の有用性は生徒に語ってきていることだろう。

ただ、私がこの「人生に往復切符は・・・」と語ってきたのは、自分自身の反省によるところが大きい。そして、これこそが、タイトルの「ありがとう」と「ごめんなさい」に直結する。

私の父は私が十八歳、大学一年生の秋に亡くなった。血圧が高めの父だったが、亡くなる当日の昼まで元気で、基本、病院にかからない人だった。そんな父が突然倒れ、翌日の未明に帰らぬ人となった。この時、私はこれまで一番の後悔を抱えることになった。それは、父が亡くなる数日前に、大学の進学に関することでケンカをしたことである。「県外の大学でも行くことができたのではないか」金銭的な面で県内に

残ることを求められ、納得できていなかった自分は父に対して、かなり失礼なことを言ったと思う。父が亡くなり、数日経った頃、ふと、先日の私の生意気な発言について、「ごめんなさい」を言えていないことを思い出した。この時の後悔の念は、三十年以上経った今でも忘れない。裕福な家庭ではなかったが、父母は、私に十分な愛情を注いでくれた。その愛情に対して、「ありがとう」も、そして、「ごめんなさい」も伝えられずに父は逝ってしまった。この時から私の中に、「ありがとう」と「ごめんなさい」は思った時に伝えることが一番大事であると強く刻まれた。

時が経ち、私が父のなりたかった先生になったとき、母は本当に喜んでくれた。父には伝えられなかった感謝の言葉は、今も元気な母に事あるごとに伝えるよう心掛けている。そして、関わらせてもらった生徒たちにも、「ありがとう」と「ごめんなさい」は感じたときに伝えることを勧め続けている。亡くなった父からの大切な遺言だと信じて。



読書案内



■高橋聡美 著

教師にできる自殺予防

子どものSOSを見逃さない

益山小(南) 井手上 誉 弘

今年二月に、「不安や悩みがあったら話してみよう」と題した文部科学大臣メッセージが発信された。児童生徒の自殺は、教育に携わる者として哀切この上ないことである。学校においては臨床心理士を講師に研修を実施したり、関係する研修会に積極的に参加したりするなどして自殺予防に向けた教育を推し進めているところである。

昨年度、前任校で「SOSの出し方教室」を実施した(対象児童保護者への参加案内、一昨年はリモートで実施)。その講師が南さつま市

にゆかりのある高橋聡美氏であり、今回紹介する「教師にできる自殺予防 子どものSOSを見逃さない」の著者である。来校の際お話を交わしたときは、高校の同級生が同校に在籍その場に同席していたこともあり、飾らず謙虚な方だとの印象を持ったのだが、講話そして著書からは熱い思いを感じざるを得なかった。著書の序章は、コロナの心理的影響や芸能人の自殺の影響などにふれられ、「若年層の自殺は減っておらず、なんら効果的な対策を打てずにきたところでコロナ禍における自殺の急増です。子どもたちの自殺は大人の責任でしかありません。」と括られる。第一章は、子どもの自殺を理解すること、第二章は、「教師ができる自殺予防」と題して、一次予防、二次予防、三次予防と段階的な解説、第三章では、「自殺しないさせない子どもをどう育てるか」と題して自殺予防のための授業紹介の構成となっており、難しい専門用語はないのだが論理的に理解でき、抵抗なくすんなりと読み通すことができた。

著書にある高橋聡美氏の「SOSをしつかり受け止める大人が増えなければ、子どもの自殺

は減りません。」の言葉を、教育に携わる者として肝に銘じ最善を尽くしていきたい。

教育開発研究所 一九八〇円

■妹尾昌俊 著

「先生が忙しすぎる」を

あきらめない

南種子中(熊) 宮 元 康 潤

本書は、「具体的で、実現可能で、効果的な提案をする」という意味で、とても参考になるものだと思います。また、著書の中で特に印象に残ったところは、『子どもはどんなときに頑張り、優しくなれるのか。小学生・中学生の調査から分かったのは、「自分への信頼」、つまり「わたしは一人の大切な人間である」、「自分には良いところがある」という自己認識が、子どもの学習意欲などの頑張りを伸ばし、同時に人のことを大切にすることなどやさしさにも強く影響する。問題行動や学級崩壊等なるべく

未然に防ぐことをねらうならば、子どもたちの自分への信頼や自己肯定感を高める教育を、学校では教職員がチームとして、また家庭や地域の協力を得ながら進めていくことが重要というわけです。・・・生徒への管理を強めて、抑え込もうというのは、病気で例えると、症状を無理やり薬で抑えようとしていることに近いと思います。・・・それが必要な局面もありますが、本来は、病気になるないようにしていくことが重要です。具体的には、子どもたちの良いところや成長したことを認める、褒める声掛けなどを一部の教員だけでなく、学校全体できちんと意識的に進めていくことです。』ということころです。自分自身の考えを再度確認することができます。また確信へと気持ちが変わりました。学校の働き方改革・業務改善は、先生たちの人材育成・自己研鑽のためのものであり、同時に一人一人の人生をもっと豊かに楽しんでいくという教職員の生き方改革でもあります。そうした目的で前に進んでいくことが、ひいては子どもたちの成長に必ずつながるということを、学ぶことができました。繰り返し、繰り返し読むことで、新たな考え、新たな発想に出会うことができました。ぜひ、一度読まれてみてください。

教育開発研究所 二二〇〇円

■外山滋比古 著

本物のおとな論

明桜館高 野村 義文

昨年、高校三年生のLHRの研究授業を参観した。タイトルは「『大人』になる」であった。成人年齢が十八歳に引き下げられた年でもあり、生徒は自分のこととして「子どもと大人の違い」「新成人に予想されるトラブル」「大人になるにあたっての自分の決意」等、与えられたテーマに熱心に取り組んでいた。授業参観しながら「校長」の考えるべき「大人」とは何か、と考えていると、本書のことを思い出した。

著者は「知の巨人」と称された外山滋比古氏である。新聞のコラム欄で本書のことを知った。全体として読みやすく、しかし、深く考えさせられる大人論になっている。

本書は全七章からなり、「大人」とは、生活経験によって磨き上げられるものであると著者は述べている。例えば、第一章「大人の生活」では、節のタイトルとして「つつしんで歩くのが大人である」「自分のスタイルを持つのが大

人である」等、生活経験の具体例をあげ、説得力を持たせている。

私が最も興味を持った大人論は、第四章「大人の育成」である。その中の「エスカレーターではなく、階段が大人をつくる」では「エスカレーターに乗っているといかにも上へ登っていくように見えるが、登っていく力がつくわけではない。むしろ、自力を失ってしまう。階段なら、転んで、痛い目にあって、立ち上がってまた、歩き出す」とある。つまり「階段は転んで痛い目に遭うが、立ち上がって、また歩き出すことが大人を育成する」ということである。さらに、「人工知能が進化して、エスカレーター人間を脅かし始めている。」との警句も入る。

実際に、転んで、痛い目にあって、立ち上がって、また歩き出すことは簡単ではない。だから、今までの自分を振り返り、「本物の大人」になるための努力を続ける参考書としておすすめしたい。校長として学校経営に携わる立場で読むのも良いのではないかと思う。

海竜社 一一〇〇円



学校周辺から田植えの準備のための元気のよいトラクターの音が聞こえてきます。いつの間にかきれいに整えられた田んぼは、植えられたばかりの苗が列をなし、うっすらとした緑色に変わっていました。農家の営みに季節を実感する今日この頃です。

私の実家も農業を営んでおり、父は役場勤務の傍ら、母と蜜柑と米を作っていました。そのため、私たち兄弟は、小学生の頃から週末の農作業は家族の義務となっていました。経験のある方はご理解いただけと思いますが、家族のためとはいえ、時間を拘束され、友人と遊びたい気持ちを我慢しての農作業は苦役そのものでした。暑さ寒さに耐えながら、長時間の労働に体力・気力を必要とする厳しさを感じていました。また、その日その日で父親の指示で手伝っていましたので、当時はなぜこの作業が必要なのか、何のためにしているのかなど、十分に理解することもなく、早く終わらせることばかり考えていました。

ところが、そろそろ体の動かなくなった両親から、農作業を本格的に引き継がなければならぬ状況になってきました。そうなる前、一つの作業の準備や意味について、よく考えるようになりました。そのような立場になって、初めて気付くことがいくつもありました。稲作の作業工程は小学生の社会科でも主なものが紹介されていますが、実際にはもっと多くの細かい作業があります。まず、田植えを行うには、

趣味・文芸

原点である農業を趣味に

農地である田んぼの準備や、植える苗の準備が必要であり、それらにはいくつもの前段階の作業があります。また、作業で使う機械や道具の整備、材料等の確認等が必要となります。また、田植え後も、水の管理・調整、生育状況に応じて追肥や除草・薬剤散布等々、その種類は米の字を崩した「八十八」種の作業があるとも言われています。

私にとつての農作業は、学校の子供たちや職員・保護者や地域等の人を相手にする仕事と、作物を相手にする仕事とは対象の違うことから、気分を切り替える機会になっていました。ところが本格的に携わってみると、時折、作物

平佐東小(北) 今 屋 厚 造

の生育とその世話には、人の育ちについても共通することに気付かされることがあります。一つの例として、田植え後に一か月ほどたった頃に、「中干し」という作業があります。これは、田の水をすべて排水し十日間ほど地面にひびがはいるくらいに乾かす作業のことです。そうすることで、土から稲の根を傷めるガスが抜けたり、根の生長を促進する効果があり、丈夫で収穫量も増えると言われています。制限された厳しい状況におかれた稲は、水分を求めて、人が手を伸ばすように、その根をどんどん伸ばしていきます。逆にいつでも満たされた状態のまま

まだと根を伸ばす必要がないため、短い根のまま生長するそうです。そうすると、稲穂の重さに耐えられなくなったり、少しの風でも倒れやすくなったりして、収穫量にも大きな影響があるということが分かりました。このことは、「根っこが大事」と言われる人間の生き方にも通ずるものがあると思います。何不自由なく与えられ満たされていくと、自分から求めることや何くそと踏ん張る力が育ちにくいのではないかと思われます。適度な加減は必要ですが、課題を乗り越えていく経験が、人の生きる力となっていくことに改めて稲作を通して気付かされました。学校での植物の世話は、水やりは欠かせないものとして、あたりまえに思っていた常識を覆すような農業の奥深さを感じました。

「松の事は松に習え、竹の事は竹に習え、子供の事は子供に習え」という言葉

があります。前半の松と竹は、俳人松尾芭蕉のものですが、後半の子供の事は子供に習えという教えは教育界でもよく知られている言葉です。自然観察の大切さから、対象物をしっかりと見て、その実態から学ぶ姿勢は、農業はもちろん、様々な仕事や教育にも通ずる考え方だと言われています。

しばらくは週末の気分転換としての農作業を楽しむながら、私自身の新たな視点での気付きや、考えを整理するきっかけとなって、週明けの学校経営に生かしていきたいと思っています。



「明日よなあ」

平和と文化の伝承

三島大里学園(郡) 山下 博文

一 はじめに

三島村は、竹島、硫黄島、黒島の三島から成り、三島村・鬼界カルデラパークに代表される豊かな自然と貴重な伝統文化、歴史を有する県本土に最も近い離島の村である。

本校のある黒島は三島村最西端にあり、鹿児島港から約一四〇kmの南西海上に位置する周囲約二〇km、面積一五・三九km²の島で、大里地区は島の北東部に位置する。鹿児島との交通は、村営船「フェリーみしま」が週四回就航している。途中、竹島、硫黄島に寄港するため約五時間を要する。雨上がりの空気の澄んだ日は、北北東方向に開聞岳、薩摩半島が望見される。島中央部には五〇〇〜六〇〇mの山が連なり、散在する牧場とその周囲の景観は素晴らしい。

三島村には、小中一貫教育の四つの義務教育学校がある。少人数ではあるが、一年生から九年生までの子供たちが仲良く学習や活動に取り組んでいる。三島村の学校ではアフリカの太鼓「ジャンベ」を子供たちが演奏し、

港での歓送迎や行事等で披露している。さらに、日本各地から山海留学としてやってきた「しおかぜ留学生」は、島の豊かな自然の中でのびのびと生活し、三島村でしかできない特色ある生活を通して、それぞれが自分らしさを発揮しながら充実した日々を送っている。また、「オンライン授業日本一」を目標として日常的にICTを活用した教育が行われている。他にも、島の豊かな自然を利用した「地球(ジオ)科」の学習にも積極的に取り組むなど、特色ある教育が各学校で行われている。

二 学校の概要

令和五年度の本校の児童生徒数は、前期課程(小学校)の児童九人、後期課程(中学校)の生徒が七人、計十六人の極小規模校である。少人数の良さを生かして子供たちは、大きな自然の恵みと家族的な温かい雰囲気の中で、健やかにのびのびと生活しており、温和で素直な児童生徒が多い。また、昭和三十五年には、有吉佐和子原作による「私は忘れない」の映画の舞台として本校がロケ地となった。当時の児童生徒が特別出演し、地区のふるさとセンターには記念碑が建立されている。

三 地区の特色を生かした教育活動

地区内にある「大里遺跡」からは縄文や中世(平安時代から鎌倉時代)にかけての土器及び中国からの輸入陶磁器、国内で発見されることが希少な中国瓦が出土している。これにより、黒島が大陸との交易の要所の一つであったことが分かる。さらに、源平の戦いから逃れて移り住んだ平家の人々などによって、平安時代から現代まで途切れることなく



集落が営まれていたと考えられている。「弓矢踊り」や「面踊り」など、伝承されてきた郷土芸能の担い手として、児童生徒は地域の方から指導を仰ぎ、運動会で披露している。

また、太平洋戦争末期、知覧などから沖縄方面に出撃する特攻機の通過地点であった黒島に、機体不良などが原因で不時着した特攻隊員を献身的に島民が救助したという歴史がある。学校近くにある黒島平和公園には平和観音像や御和讃の碑などが設置され、村行事として毎年、特攻平和祈念祭が行われている。特攻隊員の関係者の方々とのつながりは現在も続いており、祈年祭では、本校の児童生徒が黒島から「世界の恒久平和」を願う俳句を発表している。

四 おわりに

黒島には高校がなく、義務教育学校を卒業した生徒は、親元を離れ、島立ち(島外の高校に進学)をする。汽笛を鳴らしてやってくるフェリー、十五の春に旅立つ我が子を見送る親、家族のように接してくれた地元住民、そして学校の職員や児童生徒は一齐に「明日よなあ(また会う日まで、元気で)」と大きな声で子供たちを見送る。

大里地区では、惜別と島を旅立つ人への激励を込めた「明日よなあ」という言葉がこれからも大切に継承されていく。

立つところを掘り下げれば そこに泉がある。

(フリードリヒ・ニーチェ
1844~1900)

授けられたことを
腰を据えて地道に
取り組んだ先には
自分だからたどり
着く境地がある。

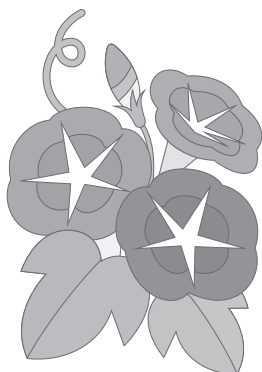


曾木の滝

© K.P.V.B

提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人鹿児島県校長会館だより

一般財団法人鹿児島県校長会館としての令和五年度の登記が完了しましたので、ご報告いたします。

【公益事業について】

平成二十四年に財団法人から一般財団法人へと移行しましたが、その際内閣府より認可に当たっての条件として、公益事業の実施が令和八年度まで義務づけられています。

公益事業は、次の大きく二つです。

一 資料刊行に関する事業

鹿児島の教育（月刊）、鹿児島の教育（特集号）、師の道を教育関係者や公立図書館等へ配布しています。

二 研修会に関する事業

毎年十二月に、一般市民を対象とした教育講演会を実施しています。

教育長異動

○新任 令和五年七月一日付

南大隅町 山下 四郎氏

(前与論町立那間小学校長)

編集

後記



この七月号が皆様のお手元に届く頃には、梅雨も明けていることでしょう。梅雨が明けると夏本番。青空に白く輝く入道雲、海水浴、スイカ、虫取り、夏祭りに花火大会……。夏という言葉からいろいろなことを思い浮かべることが出来ます。子どもの頃夏休みといえば、どんな楽しいことが待っているのか、ワクワクどきどきしていたことが思い出されます。ここ数年間は、コロナ禍のため、こうした夏の風物詩を心ゆくまで満喫することは難しかったと思いますが、今年も解禁されるものも増え、久々に夏らしい夏を味わえるのではないかと楽しみにしています。

今年の夏、それらに加えて楽しみなのが、全国の高校生が集い、開催される「かごしま総文祭」です。高校生の芸術文化活動の祭典その晴れの舞台が、ここ鹿児島で開催されるということでも楽しみです。特別支援学校も協賛部門として参加するという一方で、さらに楽しみです。わたしもぜひ、足を運んでみたいと思っています。

この「鹿児島の教育」にいただいた原稿を、拝読していると、すべての子どもたちが輝き、希望をもつて、予測不能といわれる時代の荒波をたくましく生きぬいてほしいという願いや思いが根底に流れているのを感じます。子どもたちは、夏を経験すると一回り成長します。自分も子どもたちに負けず成長する夏にしたいと思います。ぜひ、これまでもの「鹿児島の教育」も読み返して二学期からの実践の糧としたいと思います。

皆様にとっていい夏でありますように。最後に原稿を執筆し、玉稿をお寄せいただいた校長先生方に感謝申し上げます。

井上隆司(皆与志特別支援学校)